

博士論文 2023 年度

要約

運動表象の哲学

佐藤 広大

目次

第1章 序論

- 1.1 本論文の主題
- 1.2 本論文の目的と方法
- 1.3 本論文の構成

第2章 自然化された行為の哲学

- 2.1 存在論的自然主義と方法論的自然主義
- 2.2 自然化された哲学にできること
- 2.3 自然化された哲学の専門性
- 2.4 自然化された哲学と科学の関係
- 2.5 結論

第3章 運動表象の歴史

- 3.1 19世紀における運動表象概念の登場
- 3.2 ジャンヌロー
- 3.3 S・A・バタフィル
- 3.4 シニガーリャ
- 3.5 E・パシェリー
- 3.6 M・マイロポウロス
- 3.7 G・フェレッティ
- 3.8 シェパード
- 3.9 ブロッツ
- 3.10 近年の動向
- 3.11 まとめ

第4章 表象とは何か

- 4.1 表象媒体と表象内容と表象形式
- 4.2 表象の特徴
- 4.3 表象内容についての三つの立場
- 4.4 心の表象説
- 4.5 命題的態度
- 4.6 表象主義と現象主義
- 4.7 表象内容の決定
- 4.8 内在主義と外在主義
- 4.9 心の計算説
- 4.10 まとめ

第5章 運動表象の特徴

5.1 運動表象の特徴

5.2 運動表象の媒体

5.3 運動表象の形式

5.4 運動表象の内容

5.5 まとめ

第6章 運動表象は非概念的か

6.1 接続問題

6.2 既存の解決策

6.2.1 追従説

6.2.2 運動図式説

6.2.3 同一形式説

6.3 本論文の解決策

6.3.1 知覚表象に関する小口の議論

6.3.2 運動表象の内容は概念的か

6.4 結論

第7章 運動表象の存在根拠

7.1 文的な行為内意図に対するドレイファスの代案

7.2 文的な行為内意図をめぐるサール-ドレイファス論争

7.3 非-文的な行為内意図についてのパシェリーの見解

7.4 パシェリーに対する批判

7.5 結論

第8章 運動表象は意図か

8.1 シンハバブによる意図の欲求信念説

8.2 本論文の立場

8.2.1 キャンベルによる欲求の信念説

8.2.2 本論文が提案する意図の信念説

8.3 K・セティヤによる意図の信念説

8.4 運動表象は意図か

8.5 結論

第9章 結論

付論 運動表象と意図の階層モデル

1. 運動表象と意図の階層モデル

2. 運動表象と意図（遠位意図と近位意図）の影響関係

3. 運動表象と因果説

4. 意図の階層モデルは逸脱因果という問題を解決したのか

5. 行為者不在の問題

6. 結論

謝辭

参考文献

【概要】

本論文の主題は、「運動表象 (motor representation)」である。運動表象は、行為を、典型的には無意識のレベルで非-文的な形式で表す。たとえば、私が、バドミントンをしているとき、シャトルを相手のコートにさっと打ち返したとしよう。このとき、さっと打ち返すという私の行為は、シャトルを打ち返すことの一部（たとえば、ラケットを振ること）についての非-文的で（大雑把に言えば、絵や映像のような）無意識の運動表象によって引き起こされている。運動表象を使えば、これまで哲学であまり注目されてこなかった行為の無意識的で非-文的な側面がより明らかになるかもしれない。

しかし、先行研究ではそもそも運動表象がどのような特徴を持っているかということをもぐって議論がなされている。そこで、本論文の目的は、運動表象がどのような特徴を持っているかを明らかにすることである。特に、本論文は、運動表象が行為を表す仕方が非-文的であるという特徴が最も重要だと考えるので、この特徴がどのようなものなのか主に考察していく。

その際に、本論文は、心理学や神経科学など科学の知見も援用する。もちろん、本論文は、従来の分析哲学のように概念分析も行う。たとえば、意図や意図的行為に対して我々が持つ日常的な直観とある程度整合的になるように、意図や意図的行為の必要条件や十分条件について考えていく。しかし、そうした作業はあくまでも手掛かりに過ぎず、科学の知見も持ち出す。

それでは、なぜ本論文は科学の知見も持ち出すのか。上で述べたように、本論文は、行為の無意識的で非-文的な側面を明らかにしようとするような運動表象を主題とするのだった。このような運動表象を捉えきるためには、従来の分析哲学のように文を使って意識的に反省しながら運動表象の必要条件や十分条件を分析しているだけでは足りない。そこで、無意識的で非-文的なものを実験などを通じて計測しようとしてきた科学の知見も参照する必要があるが出てくる。

本論文は、序論と結論を含めた全 9 章と付論から構成されている。各章同士のおおまかな関係は次のようになっている。

まず、予備的考察を第 2 章と第 3 章で行う。第 2 章では、この論文が採用する自然主義という手法について考察する。第 3 章では、運動表象という概念の歴史を振り返る。

次に、基礎的考察を第 4 章から第 8 章までで行う。第 4 章では、運動表象とは何かを明らかにするために、そもそも表象一般の特徴を明らかにする。第 5 章では、表象一般の特徴を踏まえて、運動表象の特徴について考える。第 6 章では、運動表象の特徴のなかで最も重要な非-文的な形式であるという特徴について考える。第 7 章では、運動表象という新しい種類の心的な状態が存在する根拠について考える。第 8 章では、存在することが明らかになった運動表象は、これまで行為の哲学で論じられてきた意図の一種なのか考える。

最後に、結論の第 9 章では、本論文全体のまとめと残された課題を述べる。付論では、発展的に、運動表象が他の種類の意図とどのような関係にあるのか、そして、そのような関係

がどのような問題をさらに引き起こすのか考え、解決策を提案する。

【第2章 自然化された行為の哲学】

本論文が採用している自然主義という手法がどのようなものか説明する。上で述べたように、本論文は、運動表象がどのような特徴を持っているかを明らかにするために、科学の知見も援用するのだった。これが自然主義という手法である。自然主義を支える考えによれば、世界に存在するものは科学によって明らかになるものだけであり、哲学と科学は観察という方法と世界についての理論を構築するという目的を共有している。

そして、自然主義を採用する哲学がこれまでしてきたことやこれからしうることは、たとえば、解明しきつされていない現象に関する理論のスケッチを示すことや、科学よりも先に未発見の問いを定式化することや、蓄積された過去の知識からアイデアなどを持ち出すことなどである。

このように哲学と科学は連続していて、自然主義を採用する哲学がするのがこれらのことだとすれば、哲学の専門性、つまり、科学にはできないが自然主義を採用した哲学だけにはできることは残っているだろうか。この問いに対して、本論文は、自然主義を採用する哲学の専門性とは、科学が必要としたときにアイデアを哲学の文献のなかから素早く提供できることだと答える。以上を踏まえて、本論文が目指すのは、意図や運動表象に関する文献のなかから科学が実験可能なアイデアや理論を見つけて整理し提案することである。

本論文では、主に、科学が哲学に対して影響を与える。つまり、主に、科学の成果や合意が、哲学的な理論を構築する際の制約になる。ただし、本論文が提案する運動表象に関する哲学的な理論は運動表象に関する科学を進めていくための大きな指針にはなりうるので、本論文には哲学が科学に対して影響を与えるという側面もある。

【第3章 運動表象の歴史】

運動表象の歴史を振り返る。具体的には運動表象という語が登場したとされる19世紀の終わりから、運動表象に関する最新の文献までを追う。分野で言えば、神経科学や哲学の文献を扱うことになる。

このような振り返りを通じて、運動表象という語が様々な意味で用いられていて変遷しており、運動表象という語がどのような意味なのか整理する必要があることを明らかにする。たとえば、K・S・ラシュリーは、行為に関する表象のことを運動表象と呼んでいて、運動表象がどのような形式であるかについては注意を払っていない。

また、運動表象に関して論じてきた論者同士の共通点と相違点も明らかにする。共通点は、どの論者も運動表象が意図的行為に関わり意図的行為を引き起こすと考える点である。相違点は、それぞれの論者がこの共通点以外の運動表象の特徴についてどのように考えるかという点である。たとえば、論者によっては、運動表象が、無意識的であるということを強調したり、非-文的であるということは強調しなかったりしている。

【第4章 表象とは何か】

表象とは何かを問う。なぜなら、本論文の主題である運動表象は表象の一種なので、運動表象が何かを明らかにするためには、そもそも表象が何かを明らかにする必要があるからである。

本論文は、表象を「表象媒体」と「表象内容」と「表象形式」に区別する。表象媒体とは、表象内容を表すものを実現するものである。表象内容とは、ある物事のあり方である。表象形式とは、表象内容を表す仕方である。たとえば、「佐藤広大は博士論文を書いている」という文について考えてみよう。この文の表象媒体は、この文を実現するインクや光の点などである。この文の表象内容は、佐藤広大が博士論文を書いていることである。この文の表象形式は、文である。

次に、本論文は、表象の特徴を三つ挙げる。第一に、表象媒体の特徴は、表象内容の特徴だとはかぎらない。第二に、表象内容は、世界の実際のあり方と一致したりしなかったりする。第三に、表象内容自体は、抽象物であり、世界のなかに位置を持たない。

そして、本論文が採用するのは、表象内容に関するフレーゲ主義（表象の内容は対象が呈示される仕方である）、表象に関する実在論、心の計算説と古典主義（心はコンピュータのように表象を操作していて、かつ、脳のある部位のニューロンの発火から表象内容を読みとれる）である。また、本論文は、表象内容に関する三つの説（情報説、推論関係悦、目的論的意味論）のどれが正しいかや、表象の文法に関する内在主義と外在主義のどちらが正しいかは決めない。

【第5章 運動表象の特徴】

運動表象の特徴について考える。

5.1 節では、運動表象が運動表象と呼ばれている理由を確認したあと、運動表象が持つとされてきた八つの特徴を挙げ、そのなかでも第七の特徴である非-文的な形式であることが重要だと主張する。運動表象が持つとされてきた八つの特徴をおおまかに分類すると、第一と第二の特徴は、運動表象の内容が未来の行為に向けられたものであることに関わる。第三と第四の特徴は、運動表象を用いて主体が行う計算に関わる。第五と第六の特徴は、運動表象が無意識的であることに関わる。第七の特徴は、運動表象の形式に関わる。第八の特徴は、充足条件（ある表象がいつ満たされるか、つまり、いつ成功するかに関する条件）を持つという表象一般の特徴に関わる。ここから、第4章で導入した表象媒体と表象形式と表象内容という区別が運動表象にどのように当てはまるか示していく。

5.2 節では、運動表象の媒体は、主に脳の背側路だと主張する。

5.3 節では、運動表象の形式が、非-文的であることの根拠を確認する。

5.4 節では、運動表象の内容は、行為の目標や結果だと定める。

【第6章 運動表象は非概念的か】

運動表象が非概念的か問う。第5章で見たように、運動表象の形式は非-文的である。すると問題になるのは、非-文的な形式であるとはどのようなことかである。この問題を考えるために、本章は、「接続問題」を取り上げる。接続問題とは、非-文的な形式の運動表象と文的な形式の意図がどのように連動しているかという問題である。

この問題に対して、本論文は、新しい解決策である「概念主義的説」を提案する。概念主義的説によれば、運動表象の形式だけでなく意図の構成要素である行為概念の形式も非-文的かつ概念的なので、運動表象と意図は連動している。

この説にとって障害になるのは、行為概念は内容が構造化されていて概念的だが、運動表象の内容はきめ細かく構造化されていないので概念的ではないように思われることである。この障害に対して、本論文は、知覚の哲学における概念主義から着想を得て、運動表象の内容も概念性の基準を満たすので概念的だと答える。

【第7章 運動表象の存在根拠】

運動表象という新しい種類の心的な存在者を導入する根拠は何なのか問い直す。この問いに答えるための手掛かりとして、従来論じられてきた、意図という種類の心的な存在者を導入する根拠は何なのかという問いも取り上げる。

運動表象を導入する根拠として、本論文は二つの論証を組み合わせる。第一の論証は、ラシュリーによるもので、行為に関する表象が存在することを示す。ラシュリーが行為に関する表象が存在することの根拠として挙げる具体例は、目隠しをされてかつ脚の求心路（体の各部分の神経から体の中心の脳や脊髄の神経へと情報を集める神経の経路）を遮断されていても指定された角度で脚を曲げることができることや、楽器の演奏などにおいて感覚的なフィードバックが影響を与えられないほど素早い動きが存在することである。第二の論証は、S・A・バタフィルとC・シニガーリャによるもので、行為に関する表象のなかに非-文的な形式の表象が存在することを示す。

【第8章 運動表象は意図か】

運動表象が意図の一種か問う。なぜなら、運動表象には意図と似ている部分と似ていない部分があるからである。運動表象が意図と似ているのは、たとえば、運動表象も行為を引き起こすという部分である。一方、運動表象が意図と似ていないのは、運動表象の内容は通常は意識できないという部分である。

本論文の見立てでは、運動表象が意図の一種かという問いを考える際に鍵となるのは、どの特徴が意図の本質的な特徴かということである。本論文の考えでは、意図の本質的な特徴は、意図的行為を意図的行為たらしめるという特徴である。運動表象も意図的行為を意図的行為たらしめている。よって、運動表象も意図の一種だと本論文は主張する。

このように運動表象を意図の一種だとあえてシンプルに考えると、次のようなことが見

えてくる。従来、意図と呼ばれてきたもののなかには、大きく異なる二つのものが含まれていた。一方で、意図は意識的な実践的推論（目的から手段を導く推論）に関わると考えられてきた。他方で、意図はそれほど意識せずに行われる意図的行為にも関わると考えられてきた。本論文のここまでの議論を踏まえると、意識的な実践的推論に関わる意図が文的な意図で、意識せずに行われる意図的行為に関わる意図が非-文的な運動表象である。そして、文的な意図も非-文的な運動表象も、どちらも意図的行為を意図的行為たらしめているので、意図である。

【付論 運動表象と意図の階層モデル】

意図の階層モデルについて考え直す。意図の階層モデルが主に扱うのは、遠い未来の行為についての文的な遠位意図と、近い未来の行為についての文的な近位意図と、近い未来の行為についての非-文的な運動意図（運動表象）との間の関係である。

第 1 節では、意図の階層モデルを概観し、このモデルに登場する複数の種類の意図同士の時間的な関係について考える。本論文の主張によれば、従来の意図の階層モデルは不十分である。なぜなら、運動意図が存在しさえすれば行為は意図的になるからである。そこで、本論文は、遠位意図や近位意図は存在しないが運動意図は存在するので行為が意図的であるような事例などを取り込めるように、意図の階層モデルを修正する。

第 2 節では、運動意図とそれ以外の種類の意図との間の影響関係について考える。C・ブロッツも指摘するように、それらの間には次のような双方向の影響関係がある。まず、運動意図からそれ以外の種類の意図への影響については、通常は、適切な運動意図を選ぶことによって、ある行為をするというそれ以外の種類の意図が実行される。次に、それ以外の種類の意図から運動意図への影響については、通常は、ある行為を意図することが適切な運動意図を選ぶことにつながる。

第 3 節では、意図の階層モデルが意図の因果説を採用していることを確認し、意図（特に、運動意図）の因果説に対して挙げられうる二つの反論に応える。より重要なのは、二つ目の反論である。二つ目の反論は、運動意図自体の発生が意図的ではないとすると、そのような運動意図が引き起こした行為を意図的だと記述するのは反直観的だという反論である。この反論に対して、本論文は、次のように応える。この反論がもっともらしく見えるのは、行為の原因である運動意図まで行為であるかのように扱ってしまっているときだけである。運動意図は典型的には無意識的なものなので、運動意図自体が意図的に発生させられることはあまりない。

第 4 節では、意図の階層モデルが、運動意図に関する逸脱因果の問題をどのように解決するか示す。運動意図に関する逸脱因果の問題とは、次のようなものである。ここまでの本論文の議論によれば、意図的行為とは運動意図によって引き起こされた行為である。しかし、逸脱因果の事例では、行為が運動意図によって引き起こされているにもかかわらず、その行為が意図的だとは思われない。そこで、本論文は、逸脱因果の事例を、意図的行為の事例か

ら排除する。そのために、「意図的行為は運動意図によって引き起こされた行為である」という意図的行為に関する本論文のここまでの定義の「引き起こされた」という部分を「非逸脱的に引き起こされた」と修正する。この修正は、J・シェパードの「非逸脱の」定義を運動意図に応用したものである。シェパードは、現実に行っている行為だけでなく起こりうる行為についても考え、行為者が同じような状況で同じような行為を同じようなレベルで遂行できるか考える。シェパードは、この非逸脱の定義は科学だけでは明らかにできないと主張する。なぜなら、「同じような状況」や「同じような行為」や「同じようなレベル」が何なのかを科学だけでは明らかにできないと考えるからである。しかし、本論文は、このシェパードの考えに反対する。なぜなら、「同じような状況」や「同じような行為」や「同じようなレベル」が何なのかを究極的には科学だけで明らかにできると考えるからである。たとえば、アンケート調査を行ったり、進化論的な説明を与えたりできるだろう。

第 5 節では、意図の階層モデルが、運動意図に関する行為者不在の問題をどのように解決するか示す。行為者不在の問題とは、行為を引き起こした行為者の心的状態にさらなる原因があるにもかかわらず、なぜ行為を引き起こしたのがそのさらなる原因ではなく行為者だと言えるのかという問題である。この問題に対して、本論文は、H・G・フランクファートの考えを手掛かりに、行為者が行為を引き起こした心的状態に満足しているとき、つまり、その心的状態を変化させようとする傾向性を持たないとき、行為を引き起こしたのが心的状態のさらなる原因ではなく行為者自身だと言える主張する。